



陽気は幸せの種

陽気だより

図書出版 養徳社
〒632-0016
天理市川原城町388
TEL 0743 (62) 4503
FAX 0743 (63) 8077

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No.62

2012.5.15

第6号(24年10月号)から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年で63年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

ういえばうちの秀人兄さんだつて同じように五年——この秋にはこ

兄さんは同じ年の十月、野菊の咲き乱れた華南の野戦病院で戦病死されたというこの町の駅近い所に小料理店を経営していた木村さんの家と、小さくとも旧藩士の家柄だと格式張っていた池上の家とが家柄、身分というおおよそ封建的な垣根をぶちこわして、一つ気持でつき合えるようになったのも、こういうことからであった。だから当の健一さんとは一面識もなかったのだが、亡き兄への追慕から、ともすると馴染の人のように思われる時もある……(後略)



燃ゆる願い

橋本武
椿堂芳三郎書

嫌やな人

ぼん、ぼん——

「おや、もう二時……」

お勝手の洗場にたちながら、和代はふとその手を止めた。洗桶の底にはまだ皿が三枚、碗が二個沈んでいる。お祭の案内はたしか二時——こゝを片付けて、着換えて、途中花屋に立ち寄ると、どうでも三十分、急に心ぜわしさを感ずるとそそくさと洗物をとりあげ、器用に水を切つて揚ざるの中に並べた。折角案内してくれた今日のお祭、何とかして間に合いたかったが、もはやどうする術もない。せめて顔だけなりと、とあせる心に年老いた人の言葉が寂しく思い出される。

「健一の五年祭をつとめます。お嬢さまなりとお参りしてやって下さい」

何と早いこの頃の年月、健一さんが戦死されてからはや五年になるという。そ

ちらが案内する番になるのだ。

街の合同慰霊祭の日、はじめて名乗り合つてから、それまでは赤の他人であった木村さんと、同じ遺家族という心の結びつきから、親類同様なつき合いをつづけてきた五年間だった。もはや帰らぬ子、もはや帰らぬ兄、それでもなお何処かに生きていて、今にひよっくり帰ってくるかも知れないという、はかない希望がお互いの胸と胸とをつないで、その祥月命日にはお互いにお参りし合つてきたのだつた。

健一さんは昭和十九年七月、ソロモンの海辺で水漬く屍（おぼ）となつたという。秀人

まで交わした戦友の大林泰三と初めて出会う。○橋本武(はしもとたけし) 一九〇七—一九七一 斐山分教会二代会長。道友社長等歴任。本部准員。



大祭夜景

砂の上のにな

平坂米子さんは終戦後、大陸から文字通り無一物で引揚げて来た。しかも胃潰瘍をわずらう身であった。

引揚直後、窮迫して、母子共々田舎の海岸で、炎天に海水を汲んでは製塩をしていた時のこと、働けど働けどむくい無き運命に、死ぬことを思いながら寄せくる波を見つめていると、足下の砂にうち上げられて来る無数のにな(小さき巻貝)が目についた。

「あゝ、この貝を捕って食べたって人間は生きられないことはないのだ。人間は何ものかによって生かされている」と、おぼろげに悟ったその意味を、丁度上海から引揚げる直前知り合った天理教の布教師鈴木トラスさんによって、今はつきり認識した。

「我々人間は皆、神によって生かされている。そしてこの生かされている我々の生命を、人のために捧げあうことが、報恩の道であり、真に神の子として生きる喜びの道なのだ」

そう思うと、過去において湯水のように

に費やしてきた金銭、金によって人を使うのが当然と考えて来たことが、今更のように思い返された。かくして米子さんは、ただ、人のためにということをもっとーとして雄々しく再起の一端をたどり、現在、長崎に女ながらも大きな製薬会社を経営するまでになつていられる。(時報特別号 昭和 二五・八・二五)

罪悪の根源

身上及び財産は皆借物、

心一つが我がのものである。

心の徳だけが我が宝である。

身上使わして頂いては感謝

し、金銭使わして頂いては

感謝し、身上及び財産につ

いて、日々感謝の精神を一

刻も忘れてはならぬ。毛筋ほども、我が

物という心を持ち、我が物扱い、すなわ

ち勝手気儘な使い方をしてはならぬ。す

なわち、神と相談して、神の御許しある

方面に使わねばならない。神の心に従っ

て使わねばならない。言いかえれば八埃

を作らぬよう、助け一条の方向に使わし

て頂き、そしておれがという、私の心を少しも交ぜぬようにし、ありがたいう感謝の心を以て通らして頂くよう。借物が分らずしては真の心の徳を積むことは出来ない。借物を知らないで積んだ徳は、皆いく



らかづつ、わしがしたという高慢の埃がついていく。我が物と思う心が一切罪悪の根源である。皆、神様が、可愛い一杯の心よりお貸し下されたのである。およそ世界に、子供の物とは何一つとしてない。皆親のものばかり。その恩を知ることは人の道である。

(みちのとも 大正九・二二)

めへくのみのうちよりの

かりものを

しらずにいてはなにもわか

らん

(三・一三七)

〔「真実の道」道友社刊より〕

養徳社 よもやま話

○……朝一番の仕事は、郵便局回りから始まる。

同じ道を通る。でも、毎日違う景色と出合える。それがうれ

しい。

顔を上げると真つ青な空、曇

り空、雨の日。家並みに咲いて

いる花々、道端の草花、路地な

のに山で見かけるアケビもあつ

たりして、私の心に一日の色を

つけてくれる。

そして、私の心を元気づけて

くれる。用木^{ヨウキ}がいる。そう、

信号の前の銀杏の木。ズーっと

その場所に立って、私たちを見

守り続けている。その木に「お

はよう」と手をふれる。

ある朝、少し疲れていた私は、

「元気を下さい」とお願いして

木にふれてみた。

その日の午後、不思議にも元

気が湧いてきた。銀杏の木が力

をくれた。それから毎日、銀杏

の木に挨拶をするのが、私の日

課になった。

今日も銀杏の木から「陽」の

「気」をもらって頑張ります。

○……小学六年の息子と奈良は

若草山に登った。山道を駆け上

がった彼が、急斜面でのどかに

草をはむ小鹿を見下ろし一言。

「鹿ってタフやな」お前もここ

で一カ月暮らしたら、鹿並みに

なれる」と、答えたのでした。

4月18日 発刊
最新刊

人間がたずかる原理

—「天の理」を解きほぐす—

中臺 勘治 著
(報徳分教会長)

四六判並製 304 頁
定価=1,365 円 (税込)

養徳社
天理市川原城町 388
☎(0743)62-4503
http://yotokusha.com/